

香港で考える

—不況時の過ごし方を考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに—この不況の原因を考える—

①この何か月か、『武者修行』のつもりで、外国で開かれるいろいろな勉強会やセミナー、会議に出席させて頂いている。この6月は、5日・6日の両日、香港城市大学で開かれた「アジア、太平洋地域の現状」と題する国際会議に出席した。参加は17か国から60名（日本人1名）と小規模であった。発表者はそのうち36名で事前に準備されたペーパーは830ページもあった。

一人に与えられる発表時間は40～60分。20～30分間準備されたペーパー（論文）のポイントをわかりやすく説明した後、残り時間を使い質疑応答をするという形式で会議は進められた。休み時間や、昼食、夕食の時間は目いっぱい、ほぼ全員が議論したい人と意見交換をしていた。

会議に遅刻する人や途中でいなくなる人、居眠りをする人など、この会議では一人もいなかった。

この会議でも、よく、皆事前の準備をし、自分の意見をできるだけわかりやすい言葉で相手に説明しようという努力がみられた。質問されても、できるだけ丁寧に、わかりやすく自分の考えを述べ、質問者の意見にも耳を傾けていた。ディベートが行われていた。

自国語以外、英語をよく使いこなしていた。つまり、自分の考えを20ページ近い論文に、英語でまとめた上で、誰の力も借りずにそれを20～30分間英語でわかりやすく説明し、質問者にわかりやすく説明をし、相手との議論も深め、休み時間や食事の時間には更に深い交流も楽しむ。人生の友とも言えるような人を見つけることも多いようだ。議論の質も極めて高かった。

②名刺を頂くと、皆 Dr.とか Phd と氏名の前後に印されている。つまり、博士号をもっている人が多い。大学を出たあと、何年か実務経験を積んだ後、再び大学院に入り直し、2～3年で修士課程を終了し、その後3～5年かけて博士課程を終了するケースが多いと聞く。30代後半までは実務と大学の間を行ったり来たりしながら、理論を勉強しながら実務をやる、実務をふまえながら理論を形づくるという地道な作業を積み重ねているように思えてならない。その国だけで勉強することはなく英語を武器に外国にもどんどん出かけて、研究と実務を極めていくのが欧米流のやり方のようなのだ。

③なぜ日本が今日のような不況になり、長いこと立ち直らないのか。日本の政府や議会、日銀や金融機関、マスコミの経済担当、野党の人たちに国際経済、国際金融の基礎研究や実務についての基礎知識が、あまりにも欠けていたためだと思われる。先月号の「みにむ」で紹介させて頂いた通り、サミュエルソン教授などからは、日本の経済政策担当者は「法学部出身の経済のアマチュア」とまで言われている。これでは、何十年もかけて、実務と理論を極め尽

くした外国の「専門家」が出し続ける経済政策にかなうはずもない。

竹村健一氏が、日曜日の報道 2001 で最近よく言う「シンクタンク」なども、日本では銀行や大手会社からの出向者が多く、何年間か「腰かけ」で勤務している人が多いため、人が育たず、とても本格的な研究・政策立案までは無理というところが多い。

どんなに汗を出して働いても、為替相場が動くだけで収入が増えたり減ったりし、挙句の果ては失業者が出たり、大不況が到来するのであるから、経済の担当者が法学部出の「経済の素人」などと言われるようではまずい。

英語もどんどん日本語と同じレベルで使いこなせ、自分の意見を論文で書き表わせ、それを自分の言葉で説明できるまでに自分の英語力を高めなければならない。できれば、外国の大学で勉強し、経済学の博士号を 30 代、40 代でとれるよう努力する日本人が万人単位で出てこなければならないと思う。

百戦錬磨の外国の国際経済、国際金融担当者達と互角に渡りあえる内閣や国会、官僚、銀行、ジャーナリズム、野党のメンバーが大量に増えなければ、このような不況は、これから何回も訪れることと思う。日本の経済の担当者たちの不勉強、つまり判断ミスが世界恐慌をひきおこす。

この不況の原因の一つは、英語が日本語のように使える国際経済、国際金融のプロが内閣、国会、大蔵省、銀行、マスコミ、野党にいなすぎたことにあるというのが、私の考えだ。対策は、時間がかかるかもしれないが、そのような人達を戦略的に国を挙げて養成する以外にないと思う。

*前置きが長くなったが、では、このような不況の下でどのように過ごしたらよいかを考える。

2. 不況時の過でし方を考える

- ①「一寸先は闇」の時代に突入してしまったのであるから、非常時には非常時の生き方が必要だ。ぜひ、この「みにむ」をお読みの皆様も、自分なりの非常時の生き方をお考え頂きたい。これからの文章が、何らかのヒントになれば幸いだ。
- ②収入を増やし、支出を減らすことに徹した生活を目指すこと。どんなに不況になっても、ある程度収入があれば、生きていける。収入があっても支出が多すぎれば生活できない。では収入を増やすには、どうしたらよいか。

働ける人は、1日8時間、1週40時間、年1800時間などとケチなことは言わないでベトナムの人たちのように、3600時間働くこと。無論、身体が崩れてしまっても元も子もないが、働けるだけ働き、収入を増やすことが最も大事だ。(会社では1800時間働くことになっている場合が多いのであろうから、もう1800時間は会社の外で働くこと。家事労働、家庭菜園、ちょっとしたアルバイトなど、嫌がらず、どんどんやることだ。労働基準法の適用のない自営業者は、自社で働くべきことももちろんである)
- ③「働くことは卑しいこと」「カッコ悪い」という風潮が一般的にあるので、簡単なアルバイトは不況とはいえ、見つけやすい。楽しいからといって、年間100日以上ある休みの日は目いっぱい遊んでいたのでは、この不況は乗り切れない。賃金カット、ボーナス不支給、自宅待機、解雇

など、次から次へと経済の状況が悪くなれば、やってくるのが大不況の常識だからだ。日本人はもう随分遊んだので、そろそろ 20～30 年前を思い出して、遊ぶことを少なめにして、働くことを多くすることをおすすめする。あんなに勤勉だった日本人が、どうしてこんなにも遊び好きの怠け者になってしまったのかと言う外国人の識者も多い。身体に無理のない範囲でいいから、もう 1～2 割を働くことに時間を費やすことを考えてもよい人が多いかも知れない。

④北関東は土地が広いのだから、家庭菜園をもっともっとやってもよい。土地がなければ各市町村が農家から遊休地を借り上げて、市民に再賃貸するような「しくみ」をつくり、大いに家庭菜園やガーデニングを奨励すればよい。市民は、市町村でそのようなことをやってくれなければ、知り合いの農家や農協などに依頼し、土地を貸してくれる人をさがし求め、農業に励むことが大切だ。

もっと元気な人は、林業にも関心をもって頂き、早朝や週末は「木こり」さんになることも素晴らしい。野でも山でも一所懸命に(つまり一つの所に命を懸けるつもりで)励めば必ず「土」は一定の果実をもたらしてくれる。つまり野や山からの「収穫物」が入手でき、現金収入を補うことができる。

荒れ果てつつある山林や農地を蘇らせるよいチャンスがこの不況かもしれない。お金をかけて遊ぶ代りに、早朝や週末は野や山に出掛け、農業や林業に従事をさせて頂くことを不況時の過ごし方としておすすめする。

⑤家に小さくてもよいから野菜や果物、花などをつくるスペースがある人は、どんどん技術を取得してガーデニングに励むと、現金収入を補える。ベランダや屋上も十分利用可能だ。

⑥今までやり残した勉強や、今までに読み残した書物など、もう一度やり直したり、読み直すことも不況時にはよい時間の過ごし方となる。英会話のテープ、CD などが残り最後まで勉強し終えてないものがあれば、ぜひ何か月かけてもいいから、この時に完全にマスターしたらと思う。

不況の時は、遊ぶことを少なくし、働くことや、勉強することを多くすることが「常識」のように思われる。最もいいのは、何か明確な目標を自分で立て、戦略的にそれに向け一心不乱に勉強することだ。ぜひ、その目標の中に、「英語」の勉強と「経済」の勉強、それから「経営」の勉強、とりわけ「経営戦略」と「マーケティング」の勉強を取り入れて頂きたい。

先月号の「みにむ」でもご紹介したが、アメリカでは不況であった 1980 年代に、高校や大学を出た社会人が、コミュニティカレッジや大学、大学院に戻り、2～3 年間必死になって語学や経済学、経営学、とりわけマーケティングの勉強を真剣にして、頭の中を整理、気を取り直して仕事をし始め、今日の隆盛を見た。日本では景気がよい時のことが忘れられず、同じように遊び通し、勉強することをしない人が多い。少しずつ、日本国中が社会人の大学学習ブームになりつつはあるが、この地方はまだまだだ。2000 年から 2010 年までの 10 年間に、自分は何をどう勉強するかを、この地方の人々も今から考えておいた方がよいと思う。

⑦電気は今いる部屋しかつけない、顔を洗う時は、洗面器に水をためてから洗う。くつ下や洋服はツギを当てて、もう一度着るなどの生活上の創意工夫をしていないのは、バブルを体験して

それが忘れられない人たちだけだ。堅実な家庭に育った人たちは、世界中どこでも必要なことにはお金は使うが、不要なことはしない。電話も日本人ほどかけない。郵便で十分な場合は、手紙やハガキで済ます。まして、お金もないのに料金の高い携帯電話などは使わない。

原始時代のような生活にまで戻る必要はないが、出費は最小限にという意味で、もう一度出費項目を洗い直し、今本当に必要なところに集中して出費するのも、不況時の過ごし方であると思う。

3. おわりにー「終り」の「始まり」を迎えてー

①「我が街から一人も失業者を出さないために」どうしたらよいかを、一人一人が深く考え、打てる手はすべて打つことが今ほど重要なときはない。

②通産省が中心になってつくり上げた「ベンチャー企業育成・支援」のための政策は、これでもかと思えるほど内容豊富で、6000億円以上の今までには考えられないほどの予算もついている。元気のある人は、商工会議所や、政府系金融機関である商工中金、取り引きのある銀行の担当窓口の方に積極的に相談の上、活用できるものは総動員して自らの事業を軌道に乗せて頂きたい。大量に出ると思われる失業者の方々をすべて再雇用して頂く「ベンチャー」精神にあふれた方が、「現代の英雄」である。「企業の社会貢献活動」の中で最も大事なことは、「自社から失業者を一名も出さないこと」と、「他社からあふれ出た失業者を一名でも多く再雇用すること」である。企業経営者の方もつらいとは思いますが、どうか「社会政策」に大きく協力すると思って「雇用の安定」にお励み頂きたい。

③ヨーロッパの人々も、アメリカの人々も、皆何十年にもわたる不況期を乗り越えて今日の隆盛を迎えた。それでも失業率は10%をこえている国が多い。円高のため絶好調になったアジアの国々も現在悲惨な状況に陥っている。われわれ日本人も目を大きく見開いて、不況時にやらねばならないことを自ら考え、着実に実行する以外はない。遊ぶのはそろそろ少なめにした方がよいと思う。